

石を知り尽くすことから始まる加工

日本独自の石の文化

ヨーロッパの石造文化に対し、日本は木の文化だといわれ、建築物から日用品まで、さまざまなものが木でつくられてきました。しかし、日本でも石でつくられたものがたくさん残されています。石臼、石灯籠、常夜灯、石橋などがあります。そして城を守る石垣は美しい曲線美を誇るだけでなく、地震などに対しても非常に丈夫につくられています。

石は重量物のため、一人で作業をおこなうのは困難です。専門家集団が必要に応じて城廓建設などの現場へ赴き仕事をこなしていたようです。ただ日本ではヨーロッパほど石造建築物は多くありません。江戸時代、城の建設ブームが一段落すると共に、集団でおこなう仕事が減り、それぞれの地に定住していきます。しかし石に関する仕事がなくなったわけではありません。道標、墓碑、石臼など、石を加工する仕事であれば何でもこなすようになっていったようです。現在、石屋さんと呼ばれる人達の仕事は土木、建築、墓石、伝統分野に大きく分けられます。その中で最近では建築分野が多くを占めるようになっていきます。



建造物から装飾品まで



名古屋石材工業協同組合の前身である名古屋石工事組合が設立されたのは昭和20年代でした。現在の名古屋石材工業協同組合となったのは昭和60年のことでした。市営墓地などで墓石の仕事を受注するためということもあったようです。建築分野では柱や外壁、床などを美しく格調高く仕上げます。土木分野では石垣や庭園の工事もおこないますが、その時に野面積のづらづみという工法を使うことがあります。現在見られる多くの城の石垣はきれいに切り取られた石を積み上げられていますが、野面積は自然のままの石を加工することなく、石垣などに積み上げていく方法です。石には表と裏があり、石を熟知していなければできません。こうした伝統工法を守り、継承するのも組合の大切な活動です。

石材加工にはさまざまな分野があり、灯籠のような昔からの工作物、現代的なスタイルの置物など、注文があれば大抵の仕事をこなします。

DATA ■名古屋石材工業協同組合
所在地：北名古屋市法成寺字南出67
・昭和20年代：名古屋石工事組合を設立
・昭和60年：名古屋石材工業協同組合に改組